

2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふり 氏 名	おおさわ 大澤 裕美佳
(研究テーマ名) エイズに対する偏見抑制動機と地域性 –都市と地方在住者に着目して–	
(研究活動実績) <p>本研究は、都市に比べ地方は伝統的規範を重んじ保守性が強いと仮説を立て、都市在住者と地方在住者の社会的態度や規範意識を測定し、それらがエイズに対する偏見抑制動機にどのように影響しているかを検討した。また、大澤・池上(2012)では、エイズ患者をポジティブな文脈のシナリオ(友人が見舞に来る)の中で提示すると、エイズ一般に対する潜在的態度が好転することを見出している。このような文脈効果は、偏見抑制動機が高い者の方が認められやすい (Allen et al., 2010)ことから、都市在住者は地方在住者に比べエイズに対する偏見抑制動機が高いなら、ポジティブな文脈の影響を受けやすいと予測した。以上を検討するため、2013年11月に調査会社にモニター登録をしている都市部在住(東京都23区・大阪市)または地方在住(都市在住者および政令指定都市、県庁所在地以外の地域)の30歳～49歳の男女360名を対象にWEB調査を実施した。しかし、社会的態度における保守性やエイズに対する偏見抑制動機の程度に地域差は認められず、文脈の影響についても予測を支持する結果は得られなかった。ただ、エイズへの否定的態度の低減に関係しているのは、保守的態度ではなく革新的態度であること、また、外発的な偏見抑制動機ではなく内発的な偏見抑制動機であることなど、興味深い知見が得られた。しかし、革新的態度は内発的偏見抑制動機とのみ関連するが、保守的態度は、内発、外発いずれの動機にも関連するなど、保守・革新の態度を測定するための尺度構成を再検討する必要性が認められた。今後、被調査者の居住地域の選定基準を見直し、再度調査を行いたいと考えている。</p> <p>【2013 年度研究業績】</p> <p><学会発表> 大澤裕美佳・池上知子 ポジティブな非社会的文脈がエイズに対する顕在的態度に及ぼす影響 日本社会心理学会第54回大会 沖縄国際大学 2013年11月</p>	